

● シリーズ 私の見た日本 Vol.235

「民活宿」にみる地域文化と生活の再構築

李 奎告 (リ ケイコ)

1989年中国吉林省出身。2019年から日本に留学し、現在、大阪公立大学大学院 工学研究科 都市系建築計画・構法研究室に所属



私は2019年7月に日本へ留学し、大阪公立大学工学研究科の建築計画研究室で、ヒト・モノ・コトの関係性からみる地域に根差した民家を活用する宿泊施設をテーマに研究を続けてきました。特に関心を持ったのは、日本と中国における「民家活用型宿泊施設（以下、民活宿）」という新たな宿泊施設モデルです。民活宿とは、既存民家（空き家や古民家を含む）を活用した宿泊施設を指すもので、日本と中国各地で広がっています。

このような動向に着目し、なぜ民活宿が地域の文化保全や観光振興と結びつくのか、また地域住民や外来者がどのように関わり、どのような価値を生み出しているのかについて、具体的な事例調査を通して明らかにしたいと考える

ようになりました。民活宿は建築計画だけでなく、地域社会や文化の継承、観光政策とも密接に関わる複合的な研究対象であり、日本における多様な実践を丁寧に紐解くことは、中国における地域再生の将来像を描くうえでも有意義な示唆を与えてくれると感じています。日本は人口減少と高齢化の進展により、特に地方では空き家が増加し、地域の活力低下が深刻な問題となっています。国土交通省の調査によると、2023年には日本全国で約900万戸の空き家があり、地方都市や農村部ではこの割合がさらに高くなっています。一方、中国でも急速な都市化が進む中、農村部の人口減少と空き家の問題が顕著になっています。こうした背景のもと、私は日本で展開されてい

る地域活性化策としての民活宿に着目しました。日本の民活宿は主に三つの形態に分類できます。一つ目は「外発型」で、地域外から移住してきた人々が主導となって展開しています。二つ目の「内発型」は、地元住民自身が中心となり、自発的に地域資源を活用し運営しています。三つ目は「中間型」（複合・単独）で、地域外の人々と地元住民が共同で運営するケースです。研究の目的としては、地域文化保全と地域賦活に寄与していると考えられる民活宿の萌芽・準備段階から、成立・運営に至る展開過程を整理し、「ヒト」「モノ」「コト」の関係性からその実態と仕組みを明らかにすることです。あわせて、これらの関係性がいかにして地域再生に結



左上／民活宿〈BC〉 右上／民活宿〈HN〉 左下／民活宿〈OB〉 右下／民活宿〈DP〉



民活宿〈XLY〉



民活宿〈MMH〉

びついているのか、その構造的特徴と展開の条件を解明するとともに、地域住民主体の観光による持続可能な発展を重視するCBT（Community-Based Tourism）の理念に照らして、民活宿の取り組みが他国・他地域における持続可能な地域づくりの実践にも応用可能であることを示すことを目指します。

日本と中国は、人口減少や空き家の増加、地方の過疎化といった共通の地域課題に直面しています。一方で、こうした課題に対応するために展開されてきた民活宿には、共通して観光政策を基盤としながらも、制度的背景や推進主体の違いにより、異なるプロセスをたどっています。日本の事例では、個人主体によるボトムアップ型のまちづくりのなかで、空き家や古民家を活用した宿泊施設が発展してきたのに対し、中国の事例では政府主導のもと、「郷村振興戦略」などの政策を通じて、トップダウン的に建築ストックの整備と観光振興が制度的に推進されてきました。

日本の事例調査を通じて明らかになったのは、地域再生において単なる建物の改修にとどまらず、人と人とのつながり（ヒト）の構築、地域固有の活動（コト）の創出、そして伝統的な建築資源（モノ）の再生という三つの要素が相互に関係し合うことが、成功の鍵となっているという点です。

例えば、富山県南砺市井波地区の外発型民活宿〈BC〉では、移住した運営者が地元の伝統産業である木彫刻を軸に、職人との協働による工芸体験と町家での宿泊を組み合わせた取り組みを展開しています。工房と宿泊施設の一体化により、観光にとどまらない地域文化との深い関わりを生み出し、外来者による地域資源の再評価と新たな価値の創出につながっています。島根県邑智郡南町日貫地区の内発型民活宿

〈HN〉では、地域住民自らが伝統文化を体験できるプログラムを企画・運営し、訪問者との交流を通じて地域の魅力を再発見・発信しています。また、福井県小浜市丹後街道地区の中間型（複合）民活宿〈OB〉では、移住者と地元住民が協力し、伝統民家の再生や地元食材を用いた料理教室、伝統工芸の体験イベントなどを実施することで、地域文化の継承と魅力の発信に取り組んでいます。

さらに、鹿児島県奄美大島笠利町における中間型（単独）民活宿〈DP〉では、移住者を中心に奄美の伝統建築が再生され、地域の景観や文化に調和した宿泊空間が整備されています。地域住民との連携のもと、建築保存のみならず、島唄や黒糖づくりなどの文化体験プログラムも展開されており、観光を通じた地域経済の活性化と文化継承の両立が図られています。これら4つの日本の事例からは、民活宿が単なる宿泊機能にとどまらず、「ヒト・モノ・コト」の関係性を通じて地域社会の活力を再生し、持続可能な地域づくりの拠点として機能していることが明らかになりました。

このような知見を踏まえると、中国の農村地域においても、同様の取り組みを展開する可能性があると考えています。中国においても、民活宿を通じて地域住民の主體的な参加を促進し、地域資源の再評価と活用を図ることが、地域経済の活性化に寄与することが期待されます。中国での実践事例としては、雲南省大理市喜洲古鎮の外発型民活宿〈XLY〉と、河北省保定市涞水県南峪村における官主導のモデル事業〈MMH〉の二つを取り上げました。〈XLY〉は、外国人事業者が伝統建築を丁寧に再生し、国際的な文化交流の場として成功した事例であり、地域資源の魅力を再認識させると

ともに、地元住民による自営型民活宿の誘発にもつながっています。一方、〈MMH〉は「百美村庄計画」に基づく官主導の民活宿モデル事業であり、地域の建築ストックを再生しつつ観光需要を創出し、地元住民による自営型民活宿の波及と集積を促進する役割を果たしています。これらの研究成果を通じて私が強く感じたのは、地域資源の活用には物理的な建築物の再生だけではなく、人間関係の再構築と地域文化への理解が不可欠であるという点です。日本の民活宿における「ヒト・モノ・コト」の調和は、地域に根ざした観光のあり方を示唆しており、同時に中国の農村地域でも持続可能な地域再生の鍵となる可能性を秘めています。民活宿は単なる宿泊施設ではなく、地域文化を伝える場であり、人と人、都市と地方、国内外の交流を促進する装置としての可能性を有しています。今後もこの研究を通じて、地域住民が主体となる民活宿の在り方を探りながら、建築の視点から持続可能な地域づくりに貢献していきたいと考えています。

私が日本での研究生活の中で最も印象に残ったのは、地方の方々との出会いを通じて得られた温かさと信頼感です。島根県での調査時、初対面にもかかわらず親切に迎え入れてくださったご家族の姿、地元の料理を囲みながら語られた集落の歴史や思い出は、私にとって学術的知見以上にかげがえのない経験でした。こうした一つひとつの出会いが、地域の持つ潜在的な力を私に教えてくれました。「日本を見た」とは、都市の景観や観光名所を見ることではなく、人と人との丁寧な関係、そしてその中に息づく地域文化の深さを見ることだったと、今は強く感じています。この経験は、将来中国に戻って地域計画や建築教育に携わる際の、大切な礎となることでしょう。